
ゆめ・うつつ

涼火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆめ・うつつ

【Nコード】

N2778D

【作者名】

涼火

【あらすじ】

人は死ぬ前に美しくも悲しい夢を見る。その人の望むままに「死の夢」は紡がれる。人は何処から来て、何処へと去って行くのか。「死の夢」を渡ることの出来る「夢守」が見た真実とは……。高校生が主人公の現代ファンタジーです。

うつくしきゆめ

遠くの方で笑い声が聞こえた。甲高く、よく響く子供の声。その声を頼りにして歩く。歩を進めるたびに今度は水音がした。ふと、下を見下ろすと水面になっており、波紋が広がっていった。現実ではありえないこと。しかしここではありえること。なんら不思議ではないこと。

この「世界」では何もかもが存在しうる。だから何が起こっても驚いてはいけない。一歩一歩歩いてゆくと、目の前を様々なものが通過してゆく。色あせたデイベア、ガラスでできた宝石箱。小さな望遠鏡。その一つ一つがこの世界の主の「思い出」なのだ。次に現れたのは人の身長半分ほどしかない天体。天王星・月・火星・土星・・・もちろん地球もある。透明なガラスの地球は触れれば壊れてしまいそうな危うさをはらんでいた。

くすくすくす・・・。

先ほど聞こえてきた声と同じ・・・。見上げれば、先ほどの天体の中でひととき大きな三日月の上に西洋人の少女が座っていた。年のころは7つとあったところか。えくぼの愛らしい目鼻立ちの整った美しい容貌だが、あどけない表情で栗色の瞳をせわしなく動かしていた。

ベージュピンクのフリルやレースがふんだんにあしらってあるドレスを着て、ふんわりとしたスカートの裾からはぴかぴかに磨いてあるエナメルの赤い靴がのぞいていた。

「みつかっちゃった」

まるでかくれんぼをしていて見つかってしまった子供のようにはにかんだ笑みを見せこちらを見た。

「・・・下ろしてくださいさる？」

両手を広げ、こちらに体を預けてくる。少女はそのままふわりと水面に降りた。まるで綿菓子のように軽かった。

「お客様なんて始めてよ。とても綺麗な方ね。・・・日本の方？」

「ええ」

「英語がお上手ね」

「・・・『ここ』では言語など何の意味も持たないですよ」

少女は弾かれたようにこちらを見て、細く息をついた。

「ねえ、あそこで座ってお話しない？」

少女が指差したのは、宙を漂っている天体の中でひとときわ大きい地球だった。

「あなたが先に乗って。私はその後に乗るから」

地球はまるで少女の言うことを聞いているかのように、するすると目の前まで降りてきた。大きな水晶玉を見ている気分になる。頂上までよじ登ると今度は少女が飛び上がり胸の中に飛び込んできた。ふわふわとした栗色の髪が腕に触れた。

「・・・小さな頃は、こうしてよくロッキングチェアに父様と2人座っていたわ。まあ、あなたみたいな美男子ではなかったけれど・・・」

少女は苦笑し、ぽつりぽつりと語り始めた。

「父様の話すことはもっぱら、星・・・天体のことばかりだった。天文学者だったのよ。屋根裏部屋に望遠鏡を設置して、2人してよく星を眺めたわ。休日も夕食の時も話すことも星の話ばかりで母様や妹のミッチェルは呆れていた。そんな父様の話を聞きたがったのは、家族中で同じく物好きな私ぐらいだったわ」

首をめぐらせ、少女はまわりの風景に見とれるかのようにしばらく言葉を発さなかった。

「だから私も父様みたいな将来は天文学者になるんだ、って大学も宇宙物理学を専攻して・・・あの頃は毎日がきらきらして・・・まぶしかった。当時はアメリカとソ連の宇宙開発競争が起こった時代で、テレビやラジオの話題も宇宙のことではいっぱいだった。私は大学で研究に没頭しながらそれに聞き入っていたわ。私の国籍はアメリカだけど、正直なところ有人宇宙飛行に成功するのならアメリカ

力でもソビエトでもどちらでもかまわないと思っていた。1957年に初めての人工衛星スプートニクが打ち上げられたのはご存知かしら？」

「いえ」

「そう。ソ連が宇宙開発にうちこんだ最初の楔くわといえるものよ。あれが打ち上げられたと知った父様の動揺といたら・・・」

”見たか！？人工衛星がついに打ち上がったぞ！これで人が宇宙にいける可能性が高まったんだ。見るだけじゃあない、行くことのできる世界になったんだ！！”

まるで自分のことのように話す父に子供のようだ、と母は呆れ気味に苦笑しながらつぶやいていた。妹は付き合ってられない、とばかりにハイスクールを卒業してすぐに付き合っていた男性と結婚してあまり家によりつかなくなった。

「でも、そんな風に星のことしか考えてないからかしら。母様の病気にも気づけず、死に目にも会えなかった。そのとき私は生まれて初めて父を憎んだ」

少女はふと自分の掌を見つめ、天を仰いだ。

「私は父のようにはならない、そう決意したの」

「けれどあなたは、父親と同じ天文学者になった」

「意地悪ね」

ゆら、と腰まである長い栗色の髪が揺れた。

「その頃発表した論文が学会の目に留まって、ますます研究に没頭できたわ。いえ、正確に言えば父のことを忘れたかったのかもしれない。今思えば男でも、研究でもどちらでも良かった。現実から逃げられるのなら。でも、私には恋愛は不向きだったみたい。人を信じるのが怖かったのね」

恋をしなかったわけではない。人並みに付き合ってみたこともある。でも結局は自分自身をさらけ出すのが怖かった。自分は父親に似ている。良い部分も悪い部分も。父のように自分も人を知らず知らずの内に傷つけてしまうのではないか。

「自業自得ね。こうして結局自分自身の殻にこもることしかしてこなかった」

「後悔してますか？」

「さあ・・・どうかしら。でも私のたどってきた道を振り返るのであれば、この道でしか出会えない人もたくさんいた。この道でしか経験できないこともたくさんあったわ。そのどれも今の私につながっているとと思うから。『あのときこうしていれば』とは思わないようにしているの。現状に満足している人間なんていないわ」

一陣の風が吹き、少女は何かを悟ったように、地球から降り立った。そしてひとときわ高く浮かび上がっていた満月を見上げつぶやいた。

「1969年7月20日・・・」

ざああ・・・とひととき強い風が頬をなでた。

「アポロ11号が月面に着陸した日よ。・・・そして、父様の命日。・・・どこまで星が大好きなのかしら」

「それは貴女も、でしょう？」

「それもそうね。今日は何日だったかしら」

「4月12日です」

「・・・ソ連のボストーク号が始めて有人宇宙飛行に成功した日ね。私にはお誂えむき、といったところかしら・・・」

少女は目の前にいる人物の目を見据え、柔らかく微笑んだ。

「夢から醒める時間なのね」

「・・・」

沈黙が肯定だった。

「短い間だったけど、こういう風に誰かとお話できて楽しかったわ。・・・お名前を覚えていただけるかしら？」

「かたがひの楠木信、といます」

「シノブ・・・ありがとう私の最後のお話に付き合ってくれて」

「いえ、これも仕事ですから」

「しつじとっ」

「はい。夢守ゆめもりといます」

自らを夢守と名乗った青年は、少女と目線を合わせた。彼女はしばらく呆然としていたがふと気づいたように首に手を回し頬に口接けた。

「・・・父様は死ぬ間際にしきりに母様の名前を呼んでいたわ。そのときに父様を憎む気持ちもなくなつた。残つたのは自分に対するコンプレックス。私はこれまで沢山の人に支えられて生きてきた。けれど心はどこまでも一人であろうとした。人は考え方次第でどこまでも変わることのできる生き物なのね」

相手の返答を待たず、少女はもう一度、天を仰いだ。先ほどまで宙を漂っていた天体や人形などは無くなり、暗闇に染まっていた空間もまるで無に帰したかのように白く染まってゆく。そして少女もまた消えようとしていた。

「『向こう』で、もし父様に会えたら、もう一度心行くまで宇宙や天体の話をしたいわ。そして謝りたい」

少女の姿はかすんでゆき、青年はただそれを見守るだけだ。

「ありがとう、シノブ・・・」

何も存在しない『無』の空間に少女の鈴の音のような声がこだまして響いた。

「・・・ぶ！・・・のぶ！信つてば！！もう六限目終わったよ！」

甲高い少女の声で目が覚めた。机でうつぶせになって眠っていたせいか頬が痛い。

「燈乃ひの・・・ごはんは？」

青年・・・いや正確に言うのであれば、少女は眠い目をこすりながら自分を起こしてくれた友人に問うた

「・・・それが起きぬけに親友に言う言葉かよ。授業中もぐーすか寝ちゃって・・・先生も呆れてたわ。もう起こす気力も無いみたい」

「・・・ごはん」

「あーはいはい。もうHRも終わったし、早くしないと学食も席が埋まっちゃうわ。・・・まったく。こんなねぼすけが我が槇葉女学院のプリンスだなんて、世も末ね」

燈乃、と呼ばれた少女はちらり、と信のほうを見た。ショートカットの短い黒髪に何かを強く訴えようとしているかのような深い烏羽色の瞳、唇はほんのりと紅く、すらりとした背が彼女の容貌を際立たせていた。

「顔は文句なしなんだけどなあ。・・・これで男だったら私も・・・」

少し頬を赤らめながら燈乃は吐き出すかのようにいった。信はもはやご飯の事しか頭に無いのか、急いで帰り支度を整えていた。日が近いのかオレンジ色の夕日が教室を照らし、二つの長い影ができていた。

学食に入ると、隅のほうで食事をしていた中等部の学生が顔を赤らめて何やらひそひそと話し始めた。しかし当の信はそんなことには目もくれず（というか、気づいてさえいない）食券発券機のボタンを次々と押してゆく。

「・・・もう驚くのはやめたんだけど・・・。あんだんだけ食べれば気が済むわけ？」

「さあ・・・」
「はあ・・・あんだだけ寝て、こんだけ食べてたら太らない方がおかしいわよ？」

「そうかな。でもおいしいものを食べてる時って幸せだし」

「・・・今、乙女の欲望をさらっと口にしたわね・・・」

何度目か分からないため息をつきつつ、燈乃はB定食のボタンを押した。

信が学食の窓口に食券を渡したそのとき、ふと信の耳に、テレビのニュースが飛び込んできた。

「えー、たった今入ってきたニュースです。日本に来日していたの権威である、アメリカのキャロライン・カークウッド博士が心不全のため本日夕方都内の病院で亡くなりました。享年は68才でした。博士は明日K大学での講演を控えていましたが、急な発作のため昨日の夜救急車で運ばれ、意識不明の重体でした。博士は1960年にハーバード大学天文学部を卒業後、大学院に入り博士号を取得し・・・」

アナウンサーのさらさらとした感情を極限まで抑えた声が食堂に響き渡る。

「ちよつと信！！カレーライスと中華そばとオニオングラタンとカツ丼が！！」

「あ・・・ごめん・・・おばちゃんありがとう」

少しの間放心していた信は、湯気を立てて目の前に並んでいる料理を確認し、調理員に礼を言うと、なぜか親指を立ててくれた。どうやいつも沢山食べてくれる信のことを気に入っているらしい。彼女はのろのろとした動作でトレイ二枚に全部詰め込むと、それを両手で持ってふらふらと歩き出し適当に空いている席に座った。

「あー。いっつもここ混んでるよね。もうちよつと広くなんないかなあ・・・っておい聞いているかね？」

後から来た燈乃のことなどお構いなしに信はがつつき始めた。

「あんたっつて寝た後ほどうーく食べるわね。夢の中で超ハードな運動でもしてんのかしら」

もはや食事中の信にに何を言っても無駄であろうことは、長い付き合いで把握していた。

「あたしの他にあんたに付き合いきれる人っているのかしらね・・・」

「そう一人ごちながら燈乃は自分の食事に手をつけはじめた。」

「あー食べた食べた。そうだ、学校の敷地内だからって夜道には変

わらないんだから、気を抜かずに帰るのよ」

夕食をすませた二人はいったん外に出た。ここは榎葉女学院の柵寮で、信はここから徒歩五分の楓寮に住んでいる。

「ん」

「いいわよねー寮の一人部屋なんて。私も来年申請してみようかなあ」

「・・・そうしてくれると、嬉しい」

「へ？」

「いつでも燈乃に会えるし」

「そ・・・そういう台詞を言う相手はもつと他にいると思うけど・・・」

顔を赤らめながら応えると

「朝起こしてもらえるし」

「・・・ってそつちかい！」

燈乃の、のりのいいつつこみに信は顔をうつむき口角を上げた。空を仰ぐと星が瞬いてみえた。見渡すばかりの満天の星空。月光が星光を一層引き立たせひんやりとした空気が心地よかった。

「今日は星が綺麗だね」

「え？・・・ああ、ほんとだ。いつもはもやがかかっているみたいにはんやりしてるのにな」

「あの人は、会えたかな」

「え？」

「うつん。おやすみ。また、明日」

そう言つと信は踵を返し、コッソ、と靴の音をさせ燈乃と別れた。

うつくしきゆめ（後書き）

はじめての投稿で、何かと拙い面はあるかと思いますが最後まで読んでいただいております。ありがとうございました。

恋愛は・・・後々でできます（オイ）

はかなきゆめ（前編）（前書き）

書いてみたら長かったので、前後編で行こうと思います!!

はかなきゆめ（前編）

命というものは、儂いからこそ、尊く、厳かに美しいのだ（トーマス・マン）

・・・人は古来より『死』に大いなる恐怖を感じ、それを克服しようとして生きてきた。人類の歴史とは見方を変えて考えてみれば「『死』との戦い」なのかもしれない。死そのものを克服するためにより長く、楽しく「生きる」ために人は道具を作り、使うことを覚え、発達した一大コロニーである「人間」を作り上げていった。「死にたくない」

これは誰もが持つ感情。では、何故人はこれほどまでに「死」を恐れるのだろうか。（鈴木慶著『避けられた死』より第一章 「死との戦い」）

「・・・のぶ！しのぶ！信まことってば！！起きろ！」

今にも蹴りを入れかねないほどの剣幕で、今を時めく女子高生（自称）桂燈かつらひの乃がベッドの中で丸くなっている塊を揺さぶっていた。

「・・・あと五分」

「お決まりの台詞言ってんじゃないわよ！学食閉まっちゃっわよ！あんたあと1回でも遅刻したらやばいんでしょ！」

「そうだったっけ・・・」

「・・・迎えに来て正解だったわね。ほら起きる！着替える！顔洗う！歯磨く！」

そう切り返すと、燈乃はようやく布団から顔を出した信を引きずり出すと、かけてあった制服を頭から浴びせた。

「あと、十分で用意しなさい」

「・・・無理です」

「それが、さつきまでぐーすか寝ていた奴の言う台詞か！とにかく制服を着ろ！・・・って言ってるそばから寝るなよ！二度寝禁止！

・とにかく顔洗って歯磨きしてきて。頭も冴えると思うから」

「ん・・・」

ベッドから起き上がり、ふらふらーと洗面台に入っていく。

（「私がこの寮に来たら「これ」が毎朝かあ」）

燈乃は少しうんざりしたような、むしろ悟りきった僧侶のように遠い目で部屋を眺めていた。

槇葉女学院

創立百年を迎えようとしている、伝統ある中高一貫の女子高である。都心に程近いためベッドタウン的役割を果たして急成長してきた杉岡市の一種のシンボリック的存在となっている。通称は「槇女」。県内有数の進学校で、卒業生も各界で活躍している人物を多く輩出している。リベラルな校風を教育理念として掲げており、生徒の自己責任が重視される。そのため寮が存在し、生徒の自主性を養うといった名目で全国から学生を募っている。現に学生の6割ほどは入寮し、勉強と自己管理の下の生活を両立させている。人気ブランド「シックエンス Seekence」の有名デザイナーで槇葉女学院OGの水橋唯がデザインした制服も高い人気を誇っており、それが目当てで受験しに来ることもあるという。

「信、あんたさあ、もうちょっと自力で起きようとかいう心はないの？」

朝食をたらふく食べた信はようやく目が冴えてきたのか、足取り

も軽かった。比べて燈乃のほうは朝からスタミナを使い切ったのか、朝だというのにげんなりしていた。

「睡眠は人間の抱える三大欲望の一つ。中々コントロールは出来ない」

「限度があるだろ」

「でも・・・」

「鍋木先輩！おはようございます！」

急に後ろの方から朝にまったくもって似つかわしくない黄色い声が聞こえてきた。振り返ると、そこには見慣れない女子学生2人が立っていた。目を爛々と輝かせ、しきりに何かを期待していそうな瞳。

「・・・おはよう」

信が無表情ながら返事をする

（「キヤー！！」）

燈乃の聞き間違い出なければ、今度はピンク色の声が少女らから聞こえてくる。

たしかに、信は友人である燈乃から見てもかっこいい。顔立ちも整っていてそれでいて・・・、何というのだろう。鋭いナイフのような美貌というべきだろうか。そしてそれに加えて173cmという長身である。これで女子高の王子様に仕立て上げない手は無いだろう。だが、それは外見上の話。性格というか性癖は大変に難があり、付き合いの長い燈乃でも時折戸惑うことがある位である。

「じ・・・じゃあ、失礼します！！」

そのうちの一人が思いつきり一礼すると、しきりに興奮した様子で2人は笑いあいながら、中等部の校舎へと駆けていった。

「中学生かあ。いいなあ信、あんたももてじゃん。女の子だけ」

少し意地悪そうに口の端を吊り上げて、言った。

「・・・」

しかし、当の信といえばしきりに何かを考え込んでいる様子で、

うんともすんとも言い返さない。

「何？」

「何でもない。行こ」

そういうと信はすたすたと歩き出す

「ち・・・ちよつと、信！待ってよ！」

榎葉女学院高等部は学校の敷地内でも一番奥に存在する。といっても中等部や大学と渡り廊下でつながっているため、それぞれが独立しているといった環境ではない。高校の校舎を時折中学生が歩いているのを見かけることもある。それに、吹奏楽やテニスといった大きなクラブともなると中等部・高等部合同で活動することも多いという。

「はよー。お二人さん。今日もぎりぎりだねー」

そう言って、教室に入場してきた2人を迎えたのは、縁の無い至ってシンプルな眼鏡をかけ、肩ほどまでに伸びた黒髪を一つにまとめておだんごにしている少女。顔立ちは、大きな少し茶がかかった瞳が印象的だ。高校一年生というには少々幼い気もする。

「信さえ、きちんと朝起きてくれれば、こつはならないわよ！」

「おはよう。歩由^{ふゆ}」

「おはよう、王子様。窓から見ただけど、朝からもてるわね。よ！さすがは榎葉学園のプリンス！目の保養になるわあ」

歩由と呼ばれた少女は恍惚とした表情を浮かべながら、ため息をついた。何やら色々と思像を巡らせているらしいが、その内容は恐ろしくて、中等部以来の親友でもある燈乃であっても聞くことは出来ない。

「ああ、何て創作心がうずくのかしら・・・！！あんなネタやこんなネタ・・・。ああおいしすぎる・・・」

「あんだまた、信をネタにして漫画描いているわけ？よく飽きないもんねえ」

「何を言うか！！これほどの題材を前にして書かない方がおかしいというもんよ！！」

「……はあ」

この少女、唐松歩由からまつふゆは世間一般でいうところのオタクである。中学時代から漫画研究部に所属しており、自分の欲望に忠実に従って生活している。燈乃も漫画は好きで彼女からよく借りているのだが、どうも二次元と三次元の区別がつかないらしい。そしてなぜか夏休みと、冬休みの直前はテストも終了しているというのに、目の下にクマを作って登校してくる。なんでも「修羅場」がどうか……。とりあえずあまり関らないほうがよいだろうということだけは理解できた。

こんな彼女が学級委員を務めているというのであるから、世も末だ。

そしてますます理解不能だったのは、最初のHRで学級委員を決める時に自ら立候補したのである。一同騒然。当たり前だ。これまで歩由はお世辞にも学級活動に積極的に取り組んできたとはいえない。まあ、明るい性格で、どこかカリスマ性があるのは認めるが。

彼女はどちらかというところ、指示を「受ける」方ではなく「出す」ほうに向いていると燈乃は常々思ってきた。誰これかまわずマシニングントークをかますが、言っていることは筋が通っているし、ともかく弁が立つのである。相手に有無を言わせぬままOKを言わせて見せるだけの話術はある。まあ、最初HRでオタクトークをし始めたときは一部の生徒を除いてドン引きだったが……。

燈乃が学級委員を引き受けた理由を聞いてみたところ歩由はしれつとした顔で一言、

「ネタになりそうだったから」

……という爆弾発言をかましてくれたのである。

「……そういえば、今日中等部のほう静かだな、と思ったら明日から中間考査なんだよね。いやぁお疲れ様ーだね」

「完全他人事ね」

榎葉女学院は混乱を避けるためにテスト期間は中等部と高等部で分かれている。大抵は高等部の方を先にすましてしまう。こんなのほほんとした教室でも、つい一週間ほど前まではピリピリとした空気が漂っていた。

「まあね。そういえば、燈乃はどうだったのさ、中間。」

「……。この流れでそれを聞かないで……。」

「ふむ。苦戦つと。あんたさ、中学の時もそうだったけどもうちよつと要領よく勉強したら？」

「学年トップ様のおっしゃることをこの胸に刻んどくわ」

燈乃は胸に手を当て、やれやれとばかりに首をふった。おそらく今頃中間考査の結果が親の元に届いているはずだ。

南無。

一限目は古典。信は乱雑に黒板に書かれた文字を目で追っていた。すでにその目はとろんとしている。

「……であるから、この、『かかる人も、世に出でおはするものなりけり』の『けり』は助動詞のラ変形で、終止形だな。で、『けり』には色々な意味がある。ここの意味を……そうだな、鍋木……まだ寝るなよ？」

「え……、あ……。えーと、『このような立派な人も、世の中には生まれていらつしやるものだったのだ』……です」

「そうだ、この場合『けり』の意味は『過去の回想』を表していて……。」

また教師の説明に戻る。向こうの方も信の授業中の睡眠は半ば暗黙の了解と化しているらしく、厳しく追及はしてこない。それは彼女の育った環境・バックボーンもあるが、成績がトップクラスということもある。「進学校」と銘打っているからにはそれに伴う結果を世に示していかなければならない。まあ大事の前の小事には目をつぶれということか。

大きなあくびを一つして、ふと窓の外を眺めると中等部の校舎が見えた。少し目をこらすと職員室が見える。そこには先ほど挨拶してきた少女の一人が教師と何やら話し合っていた。こう見えても視力は1.5だ。何か問題を起こして叱られているといった図ではなく、相談しているといった風で教師の方も何やら困った表情で少女に問いかけている。信はしばらくそのまま眺めた後で、机につつぶして眠ってしまった。

「あのさ。」

「え？」

少女は立ち止まり、振り返るとぼかんと口をあけた。なんと今朝声をかけたばかりの、憧れである信が自分に声をかけてきたのだから。

「今時間大丈夫？」

「え……。あ……。はい」

「じゃあ行こうか」

信はすたすたと歩き始めた。しばらく呆けていた女生徒の方も我に帰りあわてて後を着いていった。

槇葉館は大正時代に建てられたという、当時の女学生の憩いの場となっていた建築物を模して二年ほど前に建てられた女学院の歴史を振り返る資料館であるが、生徒の中からはあまり存在感の無い建物として認識されており、現に信らのほかには人の姿が全くといっていいほど見当たらなかった。

「すみません。考えてみれば自己紹介がまだでしたよね。中等部一年、ももきかずは桃木和葉です」

そう自己紹介をして見せた少女はぺこりとお辞儀をした。セミロングの黒髪がさらりと肩を撫でた。黒い瞳は意志の強そうな光を放ち、まだ幼さが残るながらも、中学生にしてはどこか大人びていた。2人は休憩室と銘打ってある何やら、豪華な調度のそろった部屋

で向かい合う。

「その……。お話って何でしょうか？」

「おばあさんの所に行かなくてもいいの？」

「……っつ！！」

一葉は顔を真っ赤にして急に何かを悟ったかのようにほんの一瞬、信を睨んだ。

「……。何故、それを？」

「……本当にいいの？」

念を押すようにして信は続けた。

「……先輩は知ってますよね。この学校では成績がモノを言うんだって。いい大学に入ろうと思ったら、勉強しないといけないし、推薦一つにしたらって試験でいい成績をとらないとって。小学校からはがらりと違う」

「でも、おばあさんは君に会いたがっている」

「……っ！さつきから何なんですか！？急に呼び出したと思ったら……。私、明日テストがあるので失礼します」

軽く一礼をして少女は逃げるように去っていった。信はそれを追いかけることも無くただ少女の去り行く姿を眺めていたのだった。

はかなきゆめ（前編）（後書き）

書いてみて思ったのですが、信はつくづく王子様だなあと。（笑）
後編に続く！！

はかなきゆめ（後編）

どこまで続いているのか分からない程に深い闇の中、かすかな光がある。そこに二つの人影があつた。若い20ほどのスーツ姿の女性に、もう一人は漆黒のシャツに、ズボンといういでたちの少女、信だつた。

「その顔は、”失敗した”っていう顔だね」

にやり、と女性は笑いスーツの懐からタバコを取り出した。

「説得は得意じゃないもので」

「まあ、いいや。ライターある？」

信が返事を返す間もなく、タバコの先が赤くなった。

「……便利な世界だねえ」

「この世界には、『あなた』しかいませんから」

「……どつという意味だい？」

「この世界を構築する要素は貴女という一個人のみです。私はこうして貴方と会話することは出来ませんが、この『夢』に干渉することはできません。せいぜい貴方の構築した物に触れることが出来るぐらいです」

女性は眉をひそめ、眉間に皺を寄せた

「例えば、貴方の手にしているそのタバコもあなたが『構築』した物質の一つに過ぎません、『燃え尽きる』と命じればたちまちの内に消えてしまうでしょうし、『無くなるな』と命じればいつまでだって吸い続けていられますよ」

「じゃあさ、私だけしかいないはずの世界にいるあんたは何者なの？」

「死神ですよ」

そう言い放つ信の表情はどこか自嘲めいていた。何かに諦めきったような醒めた瞳。

スーツ姿の女性は吸ったばかりのタバコを宙に放り投げた。瞬く間に灰となって消えてゆく彼女はそれにさして興味を持った様子も無く、目を細めた。

「和葉は私に似て頑固だからねえ。ま、会いたくないのならこないだろうし、会いたいのなら来るさ。こっちから会いに行くつてのは出来ないのかい？」

「夢枕に立つ場合には、相手の霊力が高く、それにあなたが同調できるのであれば、不可能ではありません。感覚的な問題ですが。けれど、それが出来るのならば、おそらく私は今ここにはいないでしょう」

「……そりゃあそうだろうね」

女性は座り込むといつの間にやら右手に持っていた一升瓶を目の

前の杯に注いだ。

「飲むかい？」

杯をすすめられて、信はかすかに首を振った

「この世界のものは口に出来ないのよ」

「ヨモツヘグリってことかい？」

ヨモツヘグリつまりは黄泉の国のものを食することをいい、これを行うと二度と生者の世界には戻れないという。

「考え方によつてはそうかもしれませんが、そもそもこの世界はあなた自身のものです。私にはこの世界のものに『触れる』以外に干渉するすべを持ちません」

「わかるような、わからないような……。そういえば死んだ後ことなんて、考えたこともなかったな」

杯を一気に仰いで、女は空を見上げた。何も無い空間。そこにふと、一面の雪景色が広がった。

「・・・私は北風吹きささぶ寒村の生まれでね、家は決して裕福な方じゃなかった。ちょうど戦争が終り、復興の兆しを見せようとして皆、必死だった」

「当時は、女性は年頃になれば親の決めた相手と結婚する・・・、そこまで行かなくともお見合い婚が一般的だった。特に私の生まれ育った田舎なんかね。いくら男女平等が憲法の下で定められたとい

つてもまだまだ女性の立場は弱かった。私の姉は世界大戦中に18で結婚した。私もそういう人生しか歩めないのだと思った」

「でも、そんな人生は嫌だった。女だけが世界を動かしてるわけじゃないって、知らしめてやりたかった。多分戦争の後のやるせない気持ちを男のせいにしていたぶんもあるんだけど」

見合いの話はいくらでも来た。田舎の寒村だ。働き手は多いほうがいい。しかし女は決意する。

「自分の力を見せ付けてやりたい」

そればかり考えていた。だから人一倍勉強した。家の手伝いをしると、烈火のごとく怒った父親に机をひっくり返されたこともある。それでもその言葉の通り、石にかじりついて勉強した。

その甲斐あってか、当時はまだ珍しかった特待生として榎葉女学院に高等部から入学した。入学に当たつての学校からの要求はふたつ。

常にトップの成績をとり続けること

指定する大学にトップの成績で入学すること

これに異論は無かった。前者は、この学校で無料で通うということとは、向こうもそれなりにこちらに対して学力の要求が出来るということだ。後者は、いずれ大学進学に關しても奨学金をとろうと思つていたので、むしろ都合がよかった。

それからはたして幾年いくとせがたったことだろう。

私は女学院との誓いを守って大学の英文学科に進学し、卒業して通訳士として活躍した。当時の女性としては珍しく自立した存在となっていたと思う。

結婚する「予定」は無かったが、妊娠しているのに気づき、相手に打ち明けると、真剣な表情で結婚しよう、はっきり言われた。

産みたくないなんていわない。

ただ、「結婚しよう」という言葉が、私にとっては「棺桶に入れ」といわれていることと同義だった。

男に支配されたくないかない

私は私自身の意志で生きる

そう言おうとするが、なにやら熱くなっている相手に口を出すのも憚られて、そのまま成り行きで籍を入れた。

そして娘が生まれた。私は出産後、2月と発たずに職場に復帰した。現在のように産休がそうやすやすと認められるような社会ではない。命を抱え、命を懸けて「産む」ということが、男性社会には理解できなかったのだ。さも「出産」は当たり前のことだといわんばかりに。

その頃私は、田畑を手放し、年金生活に入っていた両親が私をよく訪ねてきていたから、彼らのためにマンションを借り、無理を言っただけの世話をしてもらった。

私は全くといっていいほど娘にかまったことがない。

友達は何人いるのか？好きな子はできた？嫌いな食べ物はない？好きな食べ物はない？好きな本はない？

何一つ知らない

かつて自分の中に存在し、一体となっていたはずなのに、かつて自分の一部であった存在なのに・・・知ることが出来なかったのではない。知ろうとしなかったのだ。

「だから・・・私は娘にも孫にも尊敬されるような、人間じゃないんだよ」

自嘲ともとれる微笑を見せ、ぼとりと煙草の火が落ちた。

信はただその場面を「見て」いることしかできない。彼岸に行くこととして存在に対して彼女ができるのは、「見る」ことと「話す」ことだけ。

「あんたも大変だねえ、こんな、ばばあの愚痴なんか聞かされてさ」

「さだめ、ですから」

「え？」

「運命さだめですから」

真顔でそういうと、女はふっと微笑んだ

「じゃあ、何だい？私があの子を産んだことも、運命なのかい？」

「それは、運命を受け入れる人の意志に依ります」

「そうなるべくしてそうなった」とその人自身がみとめるのであるのなら、それは『運命』と呼ぶのに相応しい。人の未来は変わるものではなく、変えてゆくものですから」

「ふうん、中々ロマンチックじゃあないか」

女はとうに火の消えた煙草を掌で握りつぶした。そこには何故か強い意志があらわれているような気がした。

「……呼んでる」

女のか細い声が、無の空間の中に響いた。

「あの子が……和葉かほはが呼んでる」

信はそれを聞いて、表情を崩さないまま、踵を返した

「ちょっと……どこに行くのさ！」

「私の”出番”は、これで終わりです。あなたに残された時間は、あとわずか」

暗闇に浮かび上がるかのようにぼやけて見える信に、女は目を閉じて答えた

「”幕引き”の時間なんだね？」

信は振り返ることなく、歩みを止めない。そして、そのまま履気楼の中へと消えていった

「起きろ！！このスカポンタン！！」

ガバリと布団を引っぺがされ、信は薄目を開けた。そこにはいつもの見慣れた、少女の顔があった。

「急がないと、朝ごはん食いつぱぐれるっぞ！！」

「……燈乃、おはよう」

「はい、おはようございます。目は冴えた？」

「……お味噌汁」

「は？」

「白ご飯、塩ジャケ、浅漬け、おひたし……」

朝ごはん和食定番メニューを口走りはじめる信に、燈乃はブチ切れ寸前だった。

「あ、玉子焼き……」

ぶちっ

「いいから、さっさと着替えて、歯磨きして、顔洗って、髪の毛梳いて、着替える！！このスカスカポントン食欲魔！！」

燈乃のトーンの高い声を聞きながら、信は夢の余韻の中に浸っていた

「あんたは、いつもいつも『自分で起きる』という発想は無いの！！？」

起きぬけにもかかわらず、朝からご飯おかわり5杯をぺろりと平らげた信は、まだ足元がおぼつかない。燈乃は目尻を吊り上げ、ずんずん先へと進む。

「明日から、起こしてやらないんだから！！」

昇降口にさしかかった所で、さすがに気になったのか、燈乃は後ろを振り返る。そこには、自分より二つか三つ年下だろう少女が、信に話しかけていた。

「あの子は・・・」

昨日信に挨拶してきた中等部の生徒だった。だが何故か制服ではなく、セーターにロングスカートという私服姿だ。距離が離れているので、何を話しているのかいまいち掴めない。少女はしきりに信に頭を下げて正門の方へと駆けていった。

信はその後姿を見送った後で、ゆっくりとした動作で昇降口へとやってきた。

「燈乃？遅刻するよ」

ぼかんとその場であっけにとられた表情の燈乃は、言われたくないことを一番言われたくない相手に言われた。しかし何故か怒りは湧き上がってこない。心の中がもやもやするだけ。

「今の子、信のファンだよね？どうしたの？」

「ちよつと、人生相談」

「はあ？」

思いつきり眉間に皺を寄せた。信が相手に務まる人生相談とは、一体どういうものなのだ。第一務まりきるのだろうか？

そのとき、教会の鐘の音にも似たチャイムの電子音が鳴り響く。予鈴だ。

「やっばー！」

燈乃は信の手をとると、そのまま校舎へと駆け入り、スプリンタ―も真つ青の走りで廊下を駆けていった。

『昨日、お祖母ちゃんの所に行ってきたんです』

信は目を合わせるだけで、言葉を発しない。

『私が病室に駆け込んで、声をかけたたん、目を開けたたんです。』

先生もびっくりしてました。』

『お祖母ちゃん、もう長いこと病気を患ってたんです。お母さん後悔してました。もつと自分からコミュニケーションをとればよかったです。本来家族が支えなければならぬのにお祖母ちゃん一人に闘わせてしまったって』

和葉は手をもじもじとさせて、一瞬顔を伏せた。

『今から、お母さんの実家に行くんです。ここへは寮に着替えを取りにきたんですよ。テストはお休みします。忌引きだと平均点はくれるらしいんで、期末で巻き返します!!』

今度は元気な、吹っ切れたような表情で顔を上げた。

『あつ、もうすぐ本鈴ですよ。ごめんなさい。じゃあ、私正門にお母さん待たせてるんで』

少女は踵を返して去ろうとする。しかし直ぐにこちらを向いて、

『お祖母ちゃん、亡くなるちょっと前に意識が戻ったって言いましてたよね？そのとき不思議なことを口にしたんです。現実主義者のお祖母ちゃんらしくないってお母さんは首を傾げてましたけど。お祖母ちゃん言っただんです。とっても綺麗な人が夢に出てきたんだって。黒髪で、黒い服を着た、とても綺麗で・・・優しい』

信は答えない。その代わり決して目をそらそうとはしなかった。

『お祖母ちゃんは「天使に出会った」って言ってました』

少々意外だったのか、信は少し目を見開いた

『じゃあ、行ってきます』

今度こそ本当に背中を向けると、正門にむかって歩き出す。

信はそれを見送ると、自分もまた校舎に向かって歩き出したのだ
った。

はかなきゆめ（後編）（後書き）

前の話から結構間が空いてしまいました。ごめんなさい。次の話はもうけっこうまとまりかけているので、早くにお届けできると思います

まどろみのゆめ(1)(前書き)

思ったよりも長くなりそうなので分割攻撃で行こうと思います)
笑)

でわー!!

まどろみのゆめ(1)

自らの「世代」の中で、その「世代」とともに生きるという、現存在に避け難い運命が、その現存在に固有な全体の出来事を構成する(ハイデッガー)

「そもそもこの文明の始まりは、”死”を『畏怖すべきもの』として認識し始めたことから始まったように思う。個々の”命”は無限ではなく、有限である。ニーチェの永劫回帰を見るまでも無くそれは当たり前のことであるが、それに人が気付き始めた頃がちょうど、文明の黎明期とも取れるのである。その証拠に文明と宗教とは切っても切れない関係にあるのだ・・・

(鈴木慶著『作られた死』より第三章「文明とは」)

無があつた。

その中に「有」があつた。

黒猫だ。

しなやかな体に、長い尾をゆらめかせ、アーモンドの形をした黒曜石の瞳がこちらを見つめている。

にゃおん

自分の牙を見せ付けるかのように、黒猫は大きな口を広げて鳴いた。甘い声というよりかは、欠伸あくびの間の抜けた声に近い。

おいで、とばかりに両手を広げ、黒猫を腕の中に招き入れた。ふさふさの毛を通じて、生き物特有の鈍い温かみが両手を伝う。

『久しぶりね』

声が聞こえた

『元気してたかい？』

少しだけしわがれた、女の声。目の前の黒猫が話しているのではない。頭の中に直接響く。まるでイヤホンで音楽を聴いているみたいだ。

『あんだ、高校に入ってから全然顔を出してこないじゃないか。明日こっちに来な。これは命令だよ』

猫はそれだけ言うと、自分の用事は済ませたとばかりに、欠伸をして腕から離れると、漆黒の暗闇の中へと姿をくらませていった。

「しーのーぶっー！」

珍しくHRの時間を起きたまますごしていた信に、クラスメイトであり世話係（自称）でもある燈乃が声をかけた。

いつものように栗色の髪をツインテールに結び上げ、少し甘く高

めの声で呼んだ。

「ねえ、今日大長編マンガの一気に読みを敢行すべく歩由の家まで行くと思うんだけど、あんたも行かない？」

「……え？」

「……毎度の事ながら人の話を全然聞かないのね」

それから少し間をおいて、

「今日さ、歩由の家にいかない？おばさんの手料理が食べられるかもよ」

「何、人ん家の食事をあてにしようとしてるのかね？」

合いの手のように、今度は少々低めのトーンの声が聞こえてきた。
唐松歩由からまついづゆこの1-Gの学級委員長であり、生粋のオタクと自称する三つ編みツインでメガネという女の子。

夏のフェスタがどうだの、「コミケ」に受かったただの、意味の分らない単語と共に、まだ5月だというのに夏休みの心配ばかりしている、およそ高校生らしくない高校生といえよう。

「いいでしょ？おばさんには『またおいで』っていわれてるんだから。信のあの食べっぷりを見て驚かないのはおばさんくらいだよ」

「……まあ、免疫あるからね」

歩由の母、歩美いづみは元『食堂のおねえさん』（本人談）であり、そ

ここでは毎日昼食時になると、目をぎらつかせた飢えた獣のような人間が次々と押し寄せるといふ、戦場のような職場であったという。(そこがどこなのかはいうまい)

というわけで、信は歩美のお気に入りなわけである。

「……やめとく」

「へっ?どして?」

出鼻をくじかれたかのように、間の抜けた声で問う。

「召集」

ぼそりと、それこそ息の音に掻き消えてしまつのではないだろうかというほどの小さな声で言い放つ。

「もしかして、例の?」

「こつくりと小さな子供が母親に頷き返すかのような仕草で、信は”是”^{イエス}と返事をした。

「……私も行っていい?」

こつくり

信は燈乃の目を見つめて、頷いた。燈乃は引き込まれそうな鳥羽^{かひりずは}色の瞳に思わず引き込まれそうになっていた。

「お熱いねえお二人さん」

「なっ・・・！」

デバガメよろしく、近くの席に座ってニヤニヤといやらしい笑みを浮かべている歩由に燈乃は思わずにらみつけた。頬が熱くなっているのがイヤでも分かる。しかし信のほうは何のことやらという顔で鞆に教科書を詰めはじめていた。

「歩由も来る？」

「え？わたし？」

意外なお誘いに、歩由は思わず聞き返した。

「うん」

「そうねえ、『召集』の意味も気になるけど、何より今度のイベントのネタになるかも・・・」

「結局それかい」

燈乃の微妙なツツコミをスルーしつつ歩由は自分の机まで戻ると、鞆を肩にかけこちらに駆け寄ってきた。信は鞆のチャックを閉めると、腕時計を確認し

「あ」

信にしては珍しく、何かに気づいて焦っているかのような声に燈乃は少々嫌な予感がした。

「何？どうしたの」

「バスの到着時間まで、あと五分」

間

「「はあ！！？？」」

バスの遠のく音を聞きながら三人が降り立ったのは、榎葉女学院のある柳町の閑静な高級住宅街とは打って変わって、「下町」という言葉がぴったりの混み混みとした町並みだった。「ラーメン1杯 210円」という驚異的な数値を示す定食屋の看板や、狭い路地裏を走る自転車か壁すれすれなのを平気で走行していたりする。人通りは多くその殆どが信たちよりも2つか3つほどしか変わらないほどの若者だ。手には大きな鞆を提げ、ある者は絵でも書くのだから一抱えほどもある大きなキャンパスを抱えながらうろつくと歩いていた。

「ここって鴻常大学とか桐野美術大学の近くだよな？」

歩由は物珍しそうにあたりを見渡した。一応お嬢様育ちの彼女にしたらきつと物珍しいのだろう。

鴻常大学は創立100年を誇る、生徒数4000人の総合私立大学である。文学部。経済学部・教育学部・理工学部・商学部を有し、様々な人材を輩出してきたことで有名である。

学生の傾向としては一貫として「庶民派」のイメージも強く、大学の周りを取り囲む食堂や居酒屋・雑貨屋は恐ろしいほどの安さをモットーとした「量より質」を重視した所が多く、学生街として長

年賑わってきた。

鴻常大学に何故か隣接するようにして存在しているのが、桐野美術大学である。ここも1000人近くの学生が絵画・彫刻・建築などといった専門分野について日夜製作に没頭している。鴻常大学と同じく庶民派なのは代わらないが、一人一人の個性はかなり強く、それが作品に表れるのは勿論のこと、ファッションや人生哲学にまで及んでおり、鴻常大学とは距離を置き長年「水と油」の仲が続いている。

信は何も言わずに歩き始める、燈乃もその後が続くを見て歩由も歩き始めた。

「ねえ、これからどこに行くか位教えてくれないよね？」

バス停までの猛ダッシュ・そして疲れのためか、息を整えるのに必死でここに来るまでの約15分間、三人は一言も話していなかった。

「……着いたらわかる」

信はそっけなく答えた後も黙々と歩き続けた。燈乃も後に続き、その後ろに何だか釈然としないといった表情の歩由が続く

そのうち狭い路地裏に進路を変更し、まっすぐな道を歩む。途中家の塀から乗り出すようにして木々が行く手の頭上をふさいでいた。家の壁という壁には蔦が生え、人の背ほどもあるつかという雑草が塀の上からこちらを見下ろしていた。

やがて突き当たりに行き着くと、今度は進路を右に変えた

「……うわぁ」

歩由は思わず感嘆の声を上げた。古ぼけた西洋風の門の向こうに、色とりどりの花に彩られた庭が広がっていた。季節が春であることもあいまってか、モンシロチョウがふわふわと飛んでいる。

そしてその更に向こうにそびえたっているのは、古めかしく、しかし上品なたたずまいを見せる和風家屋だ。手入れが行き届いており、こちらから見える縁側の廊下はぴかぴかに磨かれていた

なあん

「うおっ！！？？」

聞きなれない声に驚いて、歩由はその場を飛びのいた。しかし誰もいない。視線を下へとずらすと……

「ね……？」

黒猫だ。体は小さめでほっそりとした、どこかシャム猫を思わせる体格で、表情からはどこか貴族的な風格が感じられるほどの気品が漂っていた。くりくりとしたアーモンド型の瞳が歩由の眼鏡に映る。

「信、この子、この家の猫？」

「うん。こうやって客人を”もてなす”のがこの子の役割なんだ」

猫にしては珍しく、社交家であるらしい。燈乃は膝を着いて黒猫

を腕に招き入れた。

「ひさしぶりね、じむぎ 紬。元気してた？」

なあん

肯定ともとれるような、甘い鳴き声に燈乃は黒猫に頬擦りした。

「……信、もうそろそろここがどこだか教えてくれないんじゃない？」

「……それは」

「よう」

少しかすれた、涼しげな声。

気がつくと、縁側にいつの間にか女が立っていた。ボブカットに切りそろえられた艶やかな黒髪に、黒を基調とした普段着仕様の着物。さらさらと音を立てる布地の滑らかさはそれが、まるで彼女のために作られたことを示すようだった。顔立ちは中性的で、なまめかしい真紅の唇に、猫のようなアーモンド型の瞳がその容貌を際立たせている。

信は目線を女性の方へと向けると、自ずと口を開いた

「謡うたい」

と。

まどろみのゆめ(1) (後書き)

ずっと書きたいと思っていた「謡ねえさん」登場の巻です!!...この方の性格(もしくは本性?)を知りたい方は乞うご期待!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2778d/>

ゆめ・うつつ

2010年10月17日03時31分発行